

第2節 深橋前遺跡出土の筒状銅製品について (付 無茎銅鏃について)

はじめに

東丘陵の頂上部の平坦地に立地するS B F 08から、円筒状の青銅製品(7002)が出土した。これは、片方が3角形を呈する細長い透し穴が互い違いに4単位入れられているほか、両端の観察から、1方の端は閉塞していたと考えられる。中期古墳や朝鮮半島で出土する筒形銅器に形状が類似している。しかしながら、弥生時代末から古墳時代初頭の段階では、このような青銅製品の出土はほとんど知られていないので、この節において若干の考察を述べることにする。ところで筒形銅器とは、円筒形で片方が閉塞する、キャップ状の青銅製品であり、槍の柄や幡の旗竿の石突として用いられていたと考えられている威具⁽⁶⁾の1つである。なお、筒状銅製品という用語を用いる根拠については、はじめで出土した夜臼三代遺跡において同様の青銅製品を、筒状青銅製品と呼んでいるのに倣った。⁽⁷⁾

第2項 弥生時代後期から古墳時代初頭の筒状銅製品の出土状況

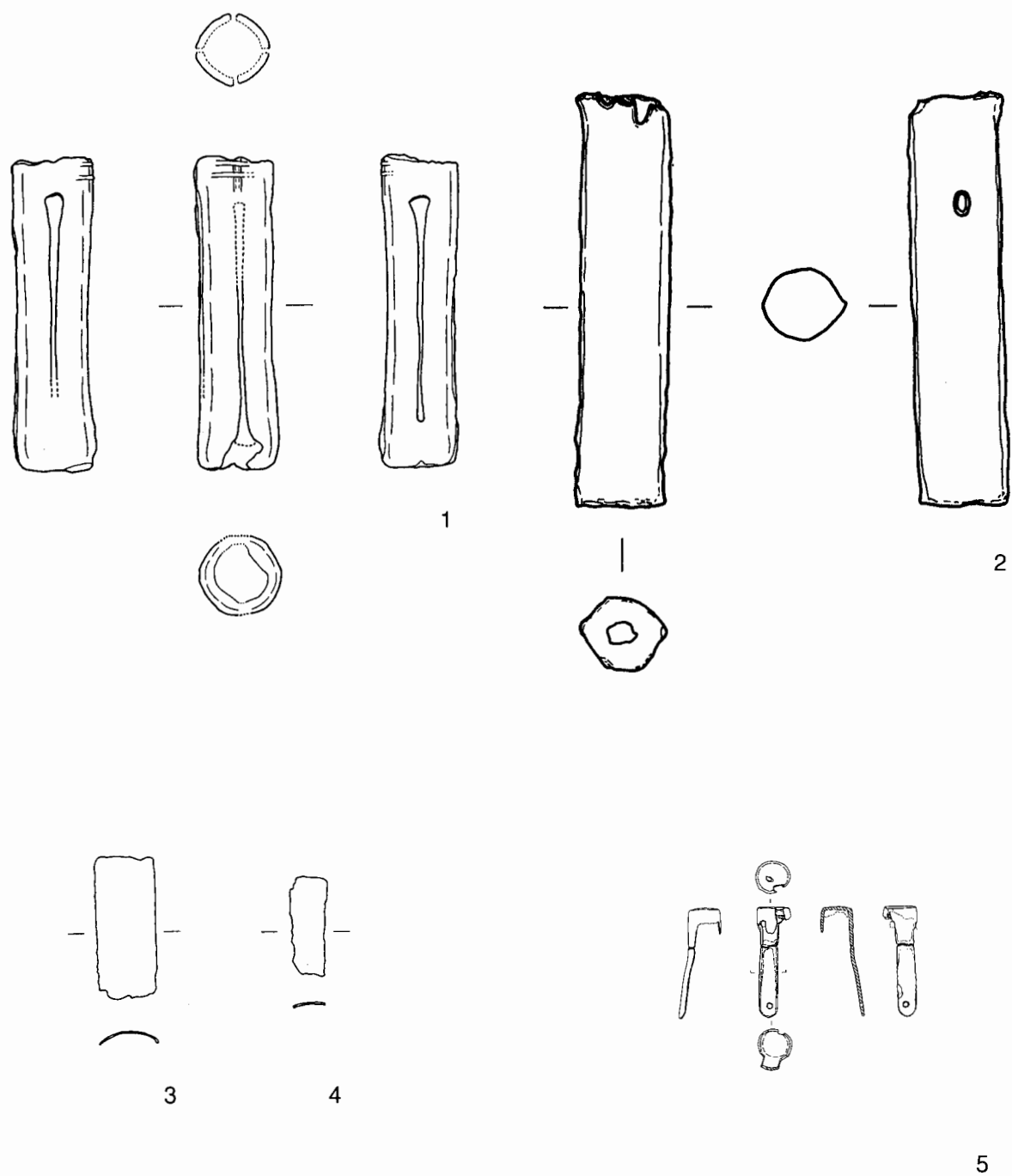
現在までに卑見に及んだ、弥生時代末から古墳時代初頭の筒状銅製品は表23のとおりである。深橋前遺跡S B F 08出土の1については、第2章第1節で詳述したのでここを参照されたい。なおこれらの遺物は、「はじめに」で定義した筒状銅製品と考えられるが、本稿における個々の遺物名称は、すべて所引報告書等でつけられている名称を用いた。

②夜臼三代遺跡群出土「筒状青銅製品」

夜臼三代遺跡群の夜臼地区第1区の大溝から出土したもので、時期は出土した土器の編年観から、弥生時代後期に所属するものと考えられる。報告書には「いわゆる筒形銅製品ではない。・・・類例を見つけることができなかったため、筒状銅製品として報告する。」とある。上端部には鋳流れと思われるあとがあり、中央部よりやや上方に目釘孔と考えられる穿孔があげられている。下方は閉塞していたようである。なお、この筒状銅製品の鋳型が、夜臼三代遺跡群の所在する福岡県粕屋郡新宮町の隣町である春日市須玖坂本遺跡から出土している。これは、青銅器生産を行った鋳造工房群に隣接する傾斜地から、6点まとまって出土した石製の青銅器鋳型のうちの1点で、長さ17.0cm・幅6.79cmで側面には無茎銅鏃の鋳型が彫り込まれている。⁽⁸⁾これらの遺物は、平成12年度「発掘された日本列島2000」に出品され、同年9月に岐阜市歴史博物館で実見した。この筒状銅製品は、深橋前遺跡のものより大きく、緑青が全体に附着しているものの、残存状態は良好であるように感じた。

表23 弥生時代後期から古墳時代初頭の筒状銅製品出土地名表

遺物名称	出土遺跡		法 量		出土遺構	時 期	出展等
			長さ	径			
1 筒状銅製品	深橋前遺跡	岐阜県	(10.0cm)	2.4cm	住居跡	廻間Ⅰ－3	本書
2 筒状青銅製品	夜臼三代遺跡群	福岡県	12.3cm	2.8cm	大溝	弥生後期	(1)
3 銅板	雌鹿塚遺跡	静岡県	(4.4cm)	(1.8cm)	包含層	弥生	(2)
4 銅板	雌鹿塚遺跡	静岡県	(3.0cm)	(1.2cm)	包含層	弥生	(2)
5 銅製品	高原遺跡	神奈川県	10.5cm	2.5cm	住居跡	弥生後期	(3)
6 小銅鐸鑄損じ品	朝日遺跡	愛知県	(6.6cm)	(1.8cm)	包含層	山中 欠山	(4)(5)



1. 深橋前遺跡出土筒状銅製品
2. 夜臼三代遺跡出土筒状青銅製品
3. 雌鹿塚遺跡出土銅板
4. 雌鹿塚遺跡出土銅板
5. 朝日遺跡出土銅鐸鑄損じ品

0 10cm
(S=1/2)

図339 現在確認できる筒状銅製品

③④雌鹿塚遺跡出土の「銅板」

弥生時代後期から古墳時代後期の土器が90%を占める遺跡で、住居跡の集中している地点付近から出土したものである。報告書には「短軸方向が湾曲する銅板で、両端を欠損している。」とのみ記されている。この2点は非常に薄いものであるが、短軸方向に湾曲していることから、筒状銅製品の可能性が窺える。またこの2点以外に、報告書には載せられていないが、長さ約5.2cm（両端部ともに完存）・径2.47cmの筒状の銅製品が出土しており、上方に2孔の穿孔・下方には4単位の透し穴がかけられ、そのまま閉塞せずに開放している。⁽⁹⁾ この形状などから石突き、もしくは把頭を想定できそうである。⁽¹⁰⁾ まだ、実見していないが、筒状銅製品と考えてよいものと考えられる。

⑤高原遺跡出土の「銅製品」

竪穴住居跡の埋土から出土したもので、『横須賀考古学会年報No36』には、「61号住居跡（弥生後期末～古墳時代初頭の貯蔵穴覆土上面から出土したもの・・・）」とあり、透し穴が3方向に入れられ、小孔が開放部に2対4箇所、閉塞部に1箇所見られる。高原遺跡を含む佐島の丘遺跡群の発掘現場とともに、筒状銅製品を実見したが、深橋前遺跡のものとはほぼ同じ大きさで、透し穴も3方向ながらも入れられており非常に類似すると考えられる。また、高原遺跡は標高約60mながらも海岸線からの比高差が非常に大きい台地上に合計290軒の竪穴住居跡が検出されていた。尾根の頂上部がなだらかであったために急傾斜地に竪穴住居跡を立てることはなかったが、深橋前遺跡の景観に近いものを感じた。筒状銅製品は緑青の附着も少なく、残存状況も良好であった。

⑥朝日遺跡出土の「銅鐸鑄損じ品」

包含層から出土したものであり、報告書には「IV2H11区の黒色中位より、銅鐸の飾耳とともに検出された。所属時期は伴出土器より山中期・欠山期の間と推定される。」⁽⁴⁾ とある。1方は閉塞しており、3方向に透し穴がある。もう一方は、そのまま開放し、下方には穿孔が1孔みられる。近年吉田広氏が、型持たせの配置などから「・・・もはや小銅鐸しかありえない。」⁽⁵⁾ と断定されているが、赤塚次郎氏は、「朝日遺跡の筒状青銅器」⁽¹¹⁾ とされているほか、鈴木敏則氏からも「筒状銅製品の可能性が高い」とご教示を得た。実見によれば、下部の破片は実測図ほど開かず、より筒形に近いように感じた。深橋前遺跡や高原遺跡のものに比べてやや小さいながらも、形状などが非常に類似することから、筒状銅製品と考えられる。

第3項 小結

筒状銅製品は、「弥生時代後期から古墳時代初頭の筒状の青銅製品で、透し穴や目釘孔が有り、中には棒を差し込んで石突として用いられた可能性があるもの」として整理できる。深橋前遺跡の筒状銅製品は、伴出の土器の編年観からⅡ-4期と判断しており、関美濃地域Ⅳ3～4段階⁽¹²⁾に併行するものと考えられる。現在のところ、この時期に北九州から関東にまで及ぶ地域で、点的にしか分布しないながらも、7点の筒状銅製品を確認することができた。今後は、青銅の小片で短軸方向に湾曲するもので、文様もなく、銅鐸の破片とするには薄いと考えられるものに検討を加えることが必要だろう。また本節第3項の②で紹介したように、夜臼三代遺跡群出土筒状銅製品の製作にあたっては、近隣の須玖坂本遺跡から、これを鑄込んだものと考えられる鑄型が出土している。しかし深橋前遺跡の近辺はもちろん、岐阜県内全域においても、それに相当するこの時期の鑄造関連遺構は確認されて

いない。平成12年度に石川県の一針B遺跡の鍛冶関連遺物の中から、組み合わせて用いたと考えられる半円筒形の鋳型が出土した。これについて筒状銅製品の鋳型としての可能性を想定したが、久田正弘氏は「筒形銅製品は、厚さの点から無理である。」⁽¹³⁾と指摘されている。今後の研究の進展を待つほかなかろう。

筒状銅製品は、透し穴や目釘孔などもあることから、中期古墳に副葬される筒形銅器の粗形の可能性が考えられる⁽¹⁴⁾。しかしながら、当時の青銅製品が、極めて貴重なものであったことを考えあわせれば、石突という威儀としての使用の可否は問題にならず、この集落の中心に存在する者の、レガリアであったことに間違いはなかろう。この銅製品も、後述する無茎銅鏃と同様に、「銅鏃や釧類は所属する氏族や部族を表象する文物」⁽¹⁵⁾であるとともに、これらの出土する地域の政治的もしくは経済的な何らかのつながりを想定する要素の1つにすることができるものと考えられる。

最後に、第6章第8節に銅製品の化学組成を載せた。しかしこの結果を本稿では、組上に載せるに至らなかった。そのため、「これまでの歴史資料の自然科学的な分析はともすれば、人文科学分野の研究者がデータを自然科学的な立場から考察することなくアクセサリ的に論文に分析値を付加するためや、・・・」⁽¹⁵⁾という誹りを免れないが、近年銅製品の出土例が増加している銅製品の基礎データとして、あえて分析し載せることにした。

付 無茎銅鏃について

SBA05から無茎銅鏃（7001）が出土した。（筒状銅製品の出土したSBF08に南東側を切られる）これについては、第4章第3節で詳述したのでここでは繰り返さないが、現在までに美濃地域において確認されている23点の銅鏃のうちの1点である。⁽¹⁶⁾深橋前遺跡出土の銅鏃以外はすべて有茎で、挟み込み式の着柄部を持つ無茎の銅鏃は、これが唯一である。また、岐阜県近辺においても発掘調査により確認されているものは、愛知県一宮市の法寺野田遺跡出土のみである。なお、このほか朝日遺跡付近でも表採されているほか、長野県下伊那郡神稲村でも発見されている。（表24）以上のようにこの銅鏃の類例は少ないため、今のところさらなる考察をするに至らなかった。したがって紹介にとどめたい。

表24 東海で確認されている無茎銅鏃（挟み込み式の着柄部を持つもの）出土地名表

出土（表採）地			法 量			出土遺構	時 期	出展等
			長さ	幅	厚さ			
1	岐阜県	深橋前遺跡	3.6cm	2.4cm	0.3cm	住居跡	廻間Ⅰ－Ⅲ	本書
2	愛知県	伝法寺野田遺跡	3.0cm	1.3cm	0.4cm	大畦畔の脇	弥生後期	(17)
3	愛知県	朝日遺跡付近	3.5cm	1.4cm	2.8cm	表採	弥生？	(18)
4	長野県	下伊那郡神稲村	3.0cm	1.9cm	0.7cm	表採	古墳時代中期以前	(19)

- (1) 西田大輔 1993 『夜白三代地区遺跡群 第1分冊』(新宮町埋蔵文化財発掘調査報告書第6集) 新宮町教育委員会
- (2) 鈴木裕篤編 1989 『雄鹿塚遺跡発掘調査報告書』(沼津市文化財調査報告書台46集) 沼津市教育委員会
- (3) 横山太郎 2001 『横須賀考古学会年報No36』横須賀考古学会
- (4) 加藤安信編 1982 『朝日遺跡Ⅱ』愛知県教育委員会
- (5) 吉田広 2000 『朝日遺跡の青銅器生産－青銅器生産の当方展開に占める位置－』『朝日遺跡Ⅵ－新資料館地点の調査－』愛知県埋蔵文化財センター
- (6) 筒形銅器の用途の諸説については、山田良三 1990 「筒形銅器の再考察」『橿原考古学研究所紀要 考古學論攷第23冊』に要領よくまとまっているので、そのまま載せる。

1	短剣の柄、剣の把ではないか。	鳥居龍蔵「東京人類学会報」17 高橋健自「考古學雑誌」2ノ3 末永雅雄『日本上代武器』
2	槍・先端につけた石突	梅原末治「佐味田及び新山古墳研究」『京都府文化財調査報告』21
3	剣の把もしくは鐙	森本六爾『日本考古學研究』
4	装飾的器物の柄に付属	小林行雄『日本考古學概説』
5	鈴として鳴らす用途の杖か石突か杖頭	三木文雄・小林行雄『世界考古学大系』 西谷真治『考古学事典』
6	響鳴音に重要な意味を有す一種の聖杖	大塚初重『三池平古墳』 藤沢長次『日本の考古学』

- (7) 筒状青銅製品としなかったのは、銅鐸、銅鏡、銅剣、銅鉾など青銅製品を銅器と呼ぶことが多いからである。
- (8) 平田定幸氏のご教示による
- (9) 山本恵一氏のご教示による。
- (10) 鈴木敏則氏のご教示による。
- (11) 赤塚次郎 2002 「東海の青銅器覚書」『考古学フォーラム15』東海考古学フォーラム編集部
- (12) 高木宏和 2002 「美濃（飛騨）地域」『弥生土器の様式と編年』木耳社
- (13) 久田正弘 2002 『小松市一針B遺跡・一針C遺跡』石川県教育委員会 (財)石川県埋蔵文化財センター
- (14) 八賀晋氏のご教示による。
- (15) 齋藤努 2001 「自然科学分野の研究者が果たす役割」『月刊 考古学ジャーナル3 No. 470, 2001』ニュー・サイエンス社
- (16) 鈴木元 2001 「一資料紹介－荒尾南遺跡出土銅鐙」『大垣市埋蔵文化財調査概要 平成12年度』大垣市教育委員会
- (17) 早野浩二 1999 「伝法寺野田遺跡（遺跡調査の概要・口絵カラー写真）」『年報 平成10年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター
- (18) 篠ヶ瀬享・増子康真 2001 「愛知県朝日遺跡表採の銅鐙から」『古代人61号』名古屋考古学会
- (19) 永峯栄一 1952 「長野縣下伊那郡神稲村出土の銅鐙」『信濃4ー7』信濃史学会

その他の参考文献

- 村上隆 2001 「青銅器の科学的研究における課題と役割」『月刊 考古学ジャーナル3 No. 470, 2001』ニュー・サイエンス社
- 平尾良光 2001 「鉛同位体比法の可能性」『月刊 考古学ジャーナル3 No. 470, 2001』ニュー・サイエンス社
- 岩永省三 2001 「考古学からみた青銅器の科学分析」『月刊 考古学ジャーナル3 No. 470, 2001』ニュー・サイエンス社